

同窓新報

題字・上野慧賢先生

発行所
東京都世田谷区
上用賀一丁目
駒沢大学高等学校
同窓会
TEL (700)6131(代)

上野校長叙勲さる



昭和四十七年十一月三日(文化の日)上野慧賢校長は多年にわたり教育界にあって人材の育成にご尽力の功績により、勲四等瑞宝章の榮譽を受けられた。同窓会としては、PTAとの共催による祝賀会を十一月二十八日(火)四谷のホテルニューオータニ(桐ノ間)で挙行了。また、同窓会一々四期生による合同祝賀会が十二月一日(金)赤坂東急観光ホテルで催された。次に上野先生の学歴・職歴をご紹介します。

明治二十九(一八九六)年六月三日、熊本県北郡日奈久町に、上野家の三男として生まれる。父は、『教育者か、軍人か、判官がよからう』という易者の占を信じて、師範学校を選んだのだそうである。
大正六(一九一七)年三月二十日、熊本第一師範学校卒業後、郷里の小学校訓導として奉職すること四年、広島高等師範学校教育科に入学、教育者は宗教家、すくなくとも、宗教に理解を持たなくてはならないという痛感し、勉強のかわらぬ宗教、基督教など、いろいろと宗教遍歴が始まった。
以後、学生監補、学生監、大学監事(庶務課長)

私立学校の特徴

名誉会長 上野 慧賢

公・私立には、それぞれ良いところがある。然し、私が、私立学校の特徴としてあげたいのは、教育の生命とも言うべき、「宗教的態度」ということについてである。
私立学校には、各々「建学の精神」というものがある。あえて、ここに、「宗教的態度」と言ったのは、必ずしも、ミッション・スクールというふうな意味ではなく、建学の精神、換言すれば、創設者の人格と、その教えを遵守して、教職員、生徒と合のものと、良い校風を継承して行く、その心構えということなのである。世人往々にして、「伝統」の凝固を云々す。然し、これは、校訓とか、信条とかの言葉の末に拘泥して、未だその精神に徹底しないからである。「己れの立つところを深く掘れ、そこには泉あり」、常に「己れを空しくして、

私は、この頃「心」と「形」ということについていろいろと考えさせられていた。
今の若い人達もそうであるが、学生時代私は、「心」と「形」というものを対比して考え、「形」より「心」が大事である、形式より実質が重要なのではないかと考え、「形」というのは何か「心」を束縛するものではないかと考えていた。
しかし、社会に出て数多くの事象を経験した現在では私は「心」と「形」というものは対立するものではなく、合一されるべきものであると思うようになり、実質と同じように形式も大事なものであると考えるようになった。
第一に、「形」は「心」を他に伝達させる働きがある。
例えば、人が内心どんなに感謝の「心」を持っていても、それが態度とか言葉とかの「形」によって外に現わされなければ、他人にはその人の感謝の気が分らない。
以心伝心という言葉があるが、それは特別な場合であり、一般社会の平凡な人間は、言葉なり態度なり「形」によって自分の「心」を他人に伝え、また他人の

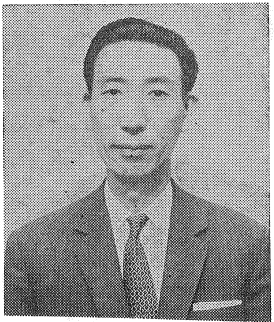
一筆啓上

故は、本原への探究であり、「不易」は、確固不動の信念である。この根本的態度をもって世に処すれば、如何なる奔流・怒濤の中にあっても、方向をあやまることはあるまい。
本校は、「信誠敬愛」の四徳目を綱領とし、これを貫ぬくに、「行学一如」の精神をもってしている。言うまでもなく、仏教「禪」に、その基調を置くものであり、単に、青少年生徒だけでなく、いやしくも、文化活動に従事する万民に、共通の終局である。信ずる。方今、国の内外を問わず、新思想乱舞し、人心は右往左往、寄るべを失っているかのように見える。時、全人類が、本来の清浄心に目覚め、天与の使命に向って、邁進する期の一日も早からんことを、同窓生の諸君と共に、衷心より念願する。いま一つは現校長上野

本会は本年第二十三回同窓会を迎えるほどの歴史もつに至った。戦後に創立された駒大高であるが二十三期生を送り出すほど、しかも年を追うごとに発展し、今日にみるようにわが校が厳として用賀の地に在ること、喜ばしいことである。本会も発足以来二十数年、その会員数も年々増加して来た。古い同窓生は各界において活躍され、新しき同窓生の多くは駒沢大学に学び、将来が期待されている。駒大高に教鞭をとっている同窓生もみられる。特筆すべきことが二つある。一つはかつて校長であった水野弘元駒大教授は教育界に尽された功績によって紫綬褒章を受章された。先生は仏教学研究において世界的知名がある学者である。いま一つは現校長上野

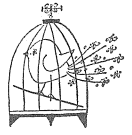
いだらうか。
私は、同窓会という「形」をとらして本校卒業生諸君の「心」が互に伝達し合っているという経験をし、「形」というものの不思議な働きに感嘆しているのである。
卒業生諸君のなかには、同窓会という「形」そのものに反発を感じている人もあると思うが、「形」というものの存在意義を認め、進んでその中に入って頂きたいと思つて。またこれまで何かの事情で、「心」は持ちながら同窓会に出席する機会を持たなかった諸君は、どうか「以心伝心」でなく「以形伝心」で總會その他の会合に出席して下さい。
卒業生諸君の「心」が集まれば同窓会という「形」も大きくなり、同窓会が大きくなれば、卒業生諸君の「心」も広く豊かに育つのではないだろうか。
これは、私の「心」の希望です。
(一期生 辨護士)

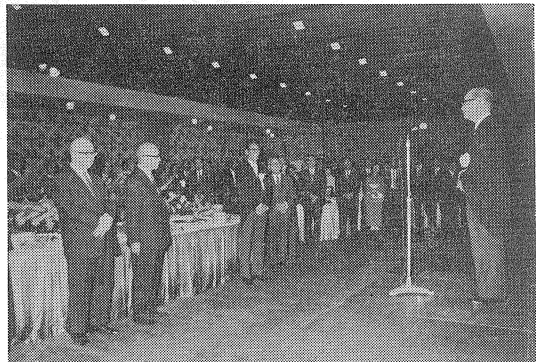
「心」と「形」



会長 秋山 彰 三

「心」が自分に伝わってくるのである。一般社会では以形伝心で生活が行われていくのである。そして他人を刺戟し、育てているという自分の「心」を伝えると、如何なる「形」を選ぶかが実際にではないだろうか。
この「心」と「形」との関係は、駒沢大学高等学校同窓会の活動において考えたい。同窓生諸君の母校に対する愛校心が「心」であり、同窓会は「形」でな





上野先生叙勲祝賀会に 列席して

会計監査 橋本信義

一九七三年の輝く新春を迎え、同窓生諸兄弟には、ますますご健祥のこととお慶び申し上げます。

すでにご承知のように、昨年、私たちの恩師上野慧賢校長が勲四等瑞宝章を受章されました。この榮譽は私たち同窓生にとっても喜ばしいことです。

去る十一月二十八日に、ホテルニューオータニにおいて、学校およびPTA、同窓

会主催による上野先生叙勲祝賀会が盛大に行われました。当日約二百名の列席者がありました。駒沢大学榎林総長を始め、水野弘元仏教学部長、吉沢文男経済学部長、石



同窓生による校歌斉唱



榎林総長の首頭で乾杯

川PTA会長、福昌寺中根専正住職、秋山彰三同窓会々長、他多数のご来賓の方々のご祝詞がありました。会はなごやかでありました。二時間もの長い祝賀会は盛會裡に終わりました。

ここに私は、高校、大学を通して学んだ「建学の精神」を新たに身込なものに感じ今後とも実社会において、この精神を軸として前進してまいりたいと思えます。

最後に上野先生のご健康とご活躍をお祈りして筆をおく次第であります。

(三期生・ポラ化粧品勤務)

一期生合同祝賀会を開く

懐しき友

三期生 島田壽三

(青空うれし)

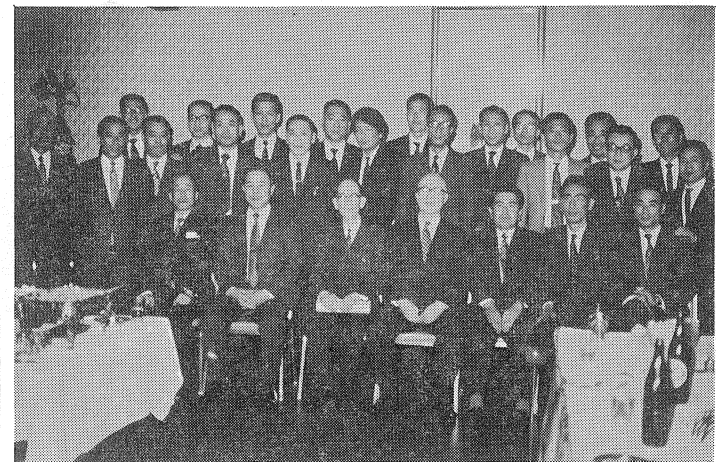
赤坂の東急観光ホテルに実に久しぶりに集った顔々々……。駒大高卒業以来初めてという顔もありその名さえ思い出せない。だがしかしそこに集っているのはまぎれもなき我が懐かしき同窓の顔である。

同期のチャールス・ブラウン君がこの日のためにわざわざ仙台からかけつけて来てくれたのは嬉しかった。葛西先生が駒大高へ赴任されて最初に教壇に立たれたブラウンの顔を見てゾッとされたという。こいつはうかつに英語を教えられんと思われたらしいがドッコイ、本人は英語が苦手な日本語ペラペラというのだから大笑い。金沢、石井、前、長南、秋山の諸先輩や四期の森本達も元氣そうな姿を見せていた。こんなに一堂に会するのが嬉しいなら毎年上野先生に叙勲してもらって、われわ

れはそれをダシに集まりたいものだ。上野先生くらい在校時に恐ろしく、そして卒業後懐かしい先生はいない。あの九州訛りの漢詩の朗詠は今でもハッキリこの耳の底に残っている。時折、駒大高へ寄せてもらおうがその都度慈愛に充ちた眼ざしで接して下さる。親が子が、成長し一家を成してもなお、子供扱いするように、上野先生の目から見てもわれわれはまだ駒大高時代のワンパクでしかないのかも知れぬ。

駒大高の歴史はまさに上野先生と共に在る。われわれはその偉大な業績を崇め、そしていつまでも壮健であられるよう祈ろう。

(漫才師)

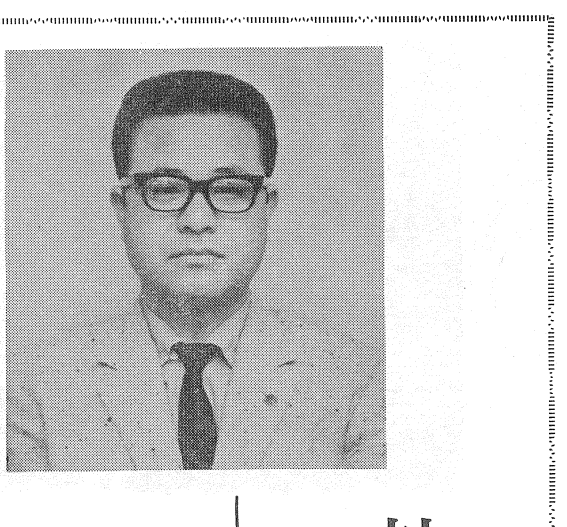


だいが前のことであるが、日中国交回復について自民党の石原慎太郎議員ともう一人の議員のテレビ対談をみた。両者の意見はほとんど対立的で、話し合いは平行線をたどったようであったが、最後になってから、その議員が「まあ、とにかく日中復交の必要などとはわかってはいるだろうかと……」というふうなことをいって対談は終りになりました。最後にいわれたことが、あるいは対談の前提になったかも知れないのであって、まず、それを確かめる努力がはらわれなければならないのに、それが最後になって一方的にぼつと出されていくのであります。もし、これが結論になっているのであれば、それはそれでよいのであるが、しかし、対談のなかでは、これを共同の結論とするための話は少しもなされていなかったのです。

このようにいつも前提をはっきりさせながら、その上で共通する点をさぐるといのが、実のある話し合いをするための必要要件である。……、米中正常化の速度は、日中正常化の急展開に比べて、明らかに緩慢だ。今度の共同声明によると、日本ははつきり一つ一つの中国」という立場をとっている。とすると理屈の上からは、台湾防衛のために日米軍基地を使用する問題などをめぐり、日米両国の間に摩擦が生ずることもあり得るわけだが……と、モートン・パルバー氏(国際政治学者、ハーバード大学助教授を経て国防総省に入り、次官補時代にアジアへの軍事介入の縮小構想を主張、キッシンジャー大統領補佐官に国家安全保障会議のスタッフとして引き抜かれたが一九六九年九月辞任、ブルッキングス研究所に移り、現在主任研究員)は、「これは日中正常化に伴う、もっともやっかいな問題かも知れない。だが、共同声明がはっきりとした形で台湾や日米安保条約に触れるのを避けたことから判断して、中国は米関係をゆさぶったり、あるいは日米軍基地を廃止するよう、日本に圧力をかけるようなまねはしていない。したがって、さし当り日中正常化に伴って、台湾防衛のような日米安保条約から出てくる義務遂行をめぐって、日米両国の間に深刻なマサツが発生するとは思えない。」という見解を示しながらも、これに続いて、「第一、中国が台湾に軍事攻撃を加えるなど本気で信じているものはどこにもない。それはあくまで『理論上の想定』にすぎず、議論の対象とはならない。」と断言している。「日中復交と米、米ブルッキングス研究所、ハルビン氏に聞く」朝日新聞、昭和四十七年九月三十日朝刊二版八ページによる。

日新聞、「泣いて笑って怒って、去る佐藤さん」跡をにごす、「出なさい、新聞記者」、会見場でカッと(毎日新聞)、「おそまつ」(毎日新聞)、「花道」で興奮、ああ、この総理と七年七月も、新聞記者に「絶交状」君たちとは話さない(読売新聞)「昭和四十七年六月十七日夕刊各紙社会面見出し」とい「君子交わりを断つて悪声」を放たず(司馬遼太郎)「新聞 朝日新聞 同十八日朝刊コラム」とし、「まともな追求する気にもならないが……とうてい首相の器ではないか」とい「読売新聞 同十八日新聞」

歴史をもち、人びとを訓練してきたものである。しかし、私たちの周囲に見られる論議の混乱には、何かそういう訓練が不足しているのではないだろうか。「出てくさい」「ハイ、出ましよう」という流行語まで生んだ六月十七日の佐藤首相の引退表明後に藤原首相の内閣記者会との会見にしても、「新聞は偏向しているからキライだ」という首相発言から、記者団が総退場し、「知る権利」最後の暴言、首相こそ血迷う、だんぜん抗議運動を、市民怒りの声(朝



日新聞、「泣いて笑って怒って、去る佐藤さん」跡をにごす、「出なさい、新聞記者」、会見場でカッと(毎日新聞)、「おそまつ」(毎日新聞)、「花道」で興奮、ああ、この総理と七年七月も、新聞記者に「絶交状」君たちとは話さない(読売新聞)「昭和四十七年六月十七日夕刊各紙社会面見出し」とい「君子交わりを断つて悪声」を放たず(司馬遼太郎)「新聞 朝日新聞 同十八日朝刊コラム」とし、「まともな追求する気にもならないが……とうてい首相の器ではないか」とい「読売新聞 同十八日新聞」

日社説と片づけているが、これは偉大な中国と、その国民との間に隣人として、私たちが周囲に見られる論議の混乱には、何かそういう訓練が不足しているのではないだろうか。「出てくさい」「ハイ、出ましよう」という流行語まで生んだ六月十七日の佐藤首相の引退表明後に藤原首相の内閣記者会との会見にしても、「新聞は偏向しているからキライだ」という首相発言から、記者団が総退場し、「知る権利」最後の暴言、首相こそ血迷う、だんぜん抗議運動を、市民怒りの声(朝

日新聞、「泣いて笑って怒って、去る佐藤さん」跡をにごす、「出なさい、新聞記者」、会見場でカッと(毎日新聞)、「おそまつ」(毎日新聞)、「花道」で興奮、ああ、この総理と七年七月も、新聞記者に「絶交状」君たちとは話さない(読売新聞)「昭和四十七年六月十七日夕刊各紙社会面見出し」とい「君子交わりを断つて悪声」を放たず(司馬遼太郎)「新聞 朝日新聞 同十八日朝刊コラム」とし、「まともな追求する気にもならないが……とうてい首相の器ではないか」とい「読売新聞 同十八日新聞」

日新聞、「泣いて笑って怒って、去る佐藤さん」跡をにごす、「出なさい、新聞記者」、会見場でカッと(毎日新聞)、「おそまつ」(毎日新聞)、「花道」で興奮、ああ、この総理と七年七月も、新聞記者に「絶交状」君たちとは話さない(読売新聞)「昭和四十七年六月十七日夕刊各紙社会面見出し」とい「君子交わりを断つて悪声」を放たず(司馬遼太郎)「新聞 朝日新聞 同十八日朝刊コラム」とし、「まともな追求する気にもならないが……とうてい首相の器ではないか」とい「読売新聞 同十八日新聞」

日社説と片づけているが、これは偉大な中国と、その国民との間に隣人として、私たちが周囲に見られる論議の混乱には、何かそういう訓練が不足しているのではないだろうか。「出てくさい」「ハイ、出ましよう」という流行語まで生んだ六月十七日の佐藤首相の引退表明後に藤原首相の内閣記者会との会見にしても、「新聞は偏向しているからキライだ」という首相発言から、記者団が総退場し、「知る権利」最後の暴言、首相こそ血迷う、だんぜん抗議運動を、市民怒りの声(朝

日新聞、「泣いて笑って怒って、去る佐藤さん」跡をにごす、「出なさい、新聞記者」、会見場でカッと(毎日新聞)、「おそまつ」(毎日新聞)、「花道」で興奮、ああ、この総理と七年七月も、新聞記者に「絶交状」君たちとは話さない(読売新聞)「昭和四十七年六月十七日夕刊各紙社会面見出し」とい「君子交わりを断つて悪声」を放たず(司馬遼太郎)「新聞 朝日新聞 同十八日朝刊コラム」とし、「まともな追求する気にもならないが……とうてい首相の器ではないか」とい「読売新聞 同十八日新聞」

日新聞、「泣いて笑って怒って、去る佐藤さん」跡をにごす、「出なさい、新聞記者」、会見場でカッと(毎日新聞)、「おそまつ」(毎日新聞)、「花道」で興奮、ああ、この総理と七年七月も、新聞記者に「絶交状」君たちとは話さない(読売新聞)「昭和四十七年六月十七日夕刊各紙社会面見出し」とい「君子交わりを断つて悪声」を放たず(司馬遼太郎)「新聞 朝日新聞 同十八日朝刊コラム」とし、「まともな追求する気にもならないが……とうてい首相の器ではないか」とい「読売新聞 同十八日新聞」

日社説と片づけているが、これは偉大な中国と、その国民との間に隣人として、私たちが周囲に見られる論議の混乱には、何かそういう訓練が不足しているのではないだろうか。「出てくさい」「ハイ、出ましよう」という流行語まで生んだ六月十七日の佐藤首相の引退表明後に藤原首相の内閣記者会との会見にしても、「新聞は偏向しているからキライだ」という首相発言から、記者団が総退場し、「知る権利」最後の暴言、首相こそ血迷う、だんぜん抗議運動を、市民怒りの声(朝

日新聞、「泣いて笑って怒って、去る佐藤さん」跡をにごす、「出なさい、新聞記者」、会見場でカッと(毎日新聞)、「おそまつ」(毎日新聞)、「花道」で興奮、ああ、この総理と七年七月も、新聞記者に「絶交状」君たちとは話さない(読売新聞)「昭和四十七年六月十七日夕刊各紙社会面見出し」とい「君子交わりを断つて悪声」を放たず(司馬遼太郎)「新聞 朝日新聞 同十八日朝刊コラム」とし、「まともな追求する気にもならないが……とうてい首相の器ではないか」とい「読売新聞 同十八日新聞」

日新聞、「泣いて笑って怒って、去る佐藤さん」跡をにごす、「出なさい、新聞記者」、会見場でカッと(毎日新聞)、「おそまつ」(毎日新聞)、「花道」で興奮、ああ、この総理と七年七月も、新聞記者に「絶交状」君たちとは話さない(読売新聞)「昭和四十七年六月十七日夕刊各紙社会面見出し」とい「君子交わりを断つて悪声」を放たず(司馬遼太郎)「新聞 朝日新聞 同十八日朝刊コラム」とし、「まともな追求する気にもならないが……とうてい首相の器ではないか」とい「読売新聞 同十八日新聞」

対話ということ

同窓会発展への一つの提言

国立コローニのぞみの園 田中資料センター室長
特殊法人 心身障害社会福祉協会評価部判定課員
福田 浩

と発展させ両国の経済、文化交流を一段と拡大する。九月三十日におこなわれた日中正常化交渉報告自民党両院議員総会に混乱が生じた原因の一つとして挙げられたことがあげられよう。私たちがとかく大前提だけですぐに特殊な結論を出してしまふのは、後者かきわめて緊密であると思われ、人間関係の希薄なところでは、よい意味での「ケンカ」をしようにも、いえない状態にある。たとえ、「ケンカ」がおこなわれたにしても、お互いに不信感や感情のしこりを残すだけである。「ケンカ」も緊密な人間関係の一つの現われであり、緊密な人間関係は、お互いが啓発され、自極的な面での要請もあるであらうが、しかし、同窓生が一つの組織をつくらなければならないという場合には、必ずしも学校にとつて同窓会は不可欠なものである。なかなかにしてみると、同窓生が一つの組織をもつには他に理由がなければならぬ。目的のない組織などというものが存続しようとするかどうかを、自分でもきびしく吟味する習慣をやしなう必要がある。

同窓会総会のために感じるのは、参加者が少く非常に淋しいということであり、同窓会が同窓生のものであるためにはどうしたらよいかということの話し合いが必要なのではないかということである。

中国の「不打不成相識」をかりるまでもなく、日本でも昔から「仲のよい兄弟はケンカする」といわれている。大人になっても兄弟ゲンカした兄や弟ほどなつかしいものである。



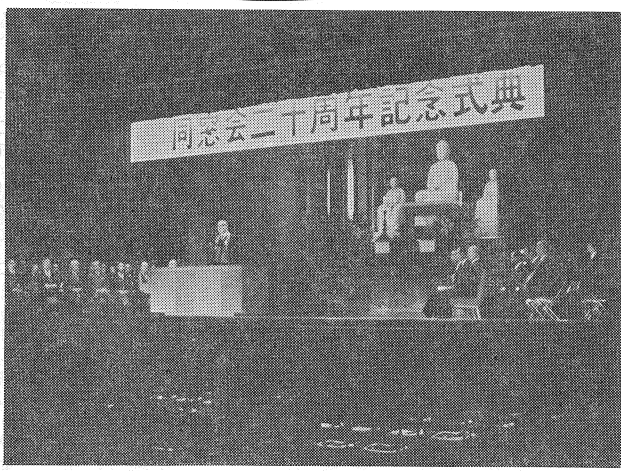
二十周年記念式典を開催

昭和四十六年十一月二十日(勤労感謝の日)駒沢大学大講堂にて本会二十周年記念式典が開催された。快晴ではあったが、風が吹き、はだ寒さを感じたけれども、榊林皓堂大学総長、藤田俊訓・館天山副学長・水野弘元教授・上野慧賢校長・大山興隆教頭をはじめ現旧教職員・現旧PTA役員・同窓生の参加を得て、盛大に催された。

榊林総長を導師として法要を営み、開式の辞、秋山彰三会長・上野慧賢校長挨拶、榊林皓堂総長・水野弘元先生祝辞の後、母校永年勤続者表彰があり、閉式の辞で第一部の幕を閉じた。

引き続き第二部アトラクションが始められた。司会は青空うれし(三期生)・たのし両氏であった。柳亭痴楽の落語・青空はるお・あきおの漫才、コロムビア・ローズや三島敏夫の歌その他に会場は湧いた。島田寿三氏(芸名青空うれし)のご尽力により豪華な顔ぶれとなった。

第二部終了後大会館の食堂にて二十周年記念祝賀パーティーが開かれ、来賓や会員の間で旧交を暖め、満員の会場のおちこちで笑い声が絶えなかったが、再び会を約して午後六時に散会した。



第七回総会開かれる

朝からどんよりと曇ったり雨四等瑞雪の栄誉を受十一月十二日(日)、母校三階階段教室にて第七回総会が開かれた。上野慧賢名誉会長のご臨席を仰ぎ、定刻より約四十五分遅れたが、石田副会長の開会の辞で始められ、四十五、四十六年度の主な事業報告(同窓新報の発行、二十周年記念式典の挙行等)および十一月三日に上野先生が多年にわたる教育界にあって人材の育成に尽力されたご功績により、石田副会長を議長に選出された。

昭和四十六年度決算報告(石井清繁氏)・昭和四十七年度決算報告(橋本信義氏)承認、昭和四十七年度予算(石井清繁氏)承認、役員改選・役員会案を承認し承認された。質疑応答の後、石井副会長の閉会の辞にて総会を終了。

三時より一階会議室にて懇親会が行なわれた。出席者が少数のため、参加者全員の自己紹介が始まった。参加者の多かった、一、二

新役員紹介

名譽会長	上野 氏
顧問	佐藤 道正
副会長	秋山 彰三
会長	榊林 皓堂
事務	田上 太秀
副事務	関田 喬
会計担当	石井 清繁
同窓新報担当	石田 一男
庶務	橋本 信正
副庶務	小坂 規矩
監査	山田 好明
庶務	宮川 健二
庶務	川島 敏之
庶務	森本 勝

昭和47年度予算

収入	4,797,153
前年度繰越金	4,797,153
会費(47年度)(450名×3,000)	1,350,000
雑収入(銀行利子)	260,000
計	6,407,153
支出	1,570,000
事務費	30,000
通信費	40,000
会議費	50,000
総会費	100,000
慶弔費	50,000
同窓新報発行費	300,000
クラス会助成費	30,000
クラブ助成費	100,000
寄付金	500,000
名簿整理準備費	200,000
予備費	170,000
計	1,570,000

昭和46年度決算報告

収入	6,646,462
前年度繰越金	5,036,661
預金利息	261,801
20周年祝賀費	37,000
46年度生終身会費	1,311,000
合計	6,646,462
支出	6,646,462
慶弔費	72,000
クラス会補助	20,000
事務費(通信費)	5,095
"(消耗品費)	3,352
運営費	91,480
20周年関係費	949,162
同窓新報発行費	208,220
学校寄付金	500,000
残高	4,797,153
合計	6,646,462

47年度 クラス会報告

5月3日	23期生E組	長棟梅峰先生を囲んで	出席者29名
6月10日	18 " A "	清水海英	" " 22名
8月27日	20 " A "	山田 勲	" " 17名
3月10日	15 "	菊地祐吾	" "

O. B. 会報告

7月30日 卓球部 松本修・横山汪先生のご出席を得て母校にてO. B.と現役との交換試合を行なう。

個人消息

6月11日	和田幸雄君(15期生D組)	が結婚されました
6月25日	白木誠一君(15期生G組)	" "
10月27日	市川仏乘先生	" "
11月3日	高橋清尊先生	" "
11月19日	沖津司郎君(18期生I組)	" "
1月26日	武井憲司君(16期生M組)	" "
3月18日	田島宏樹先生	" "
3月20日	江口幸隆君(16期生G組)	" "
10月30日	松下武司君(21期生F組)	は交通事故のため死亡されました。

特別会員の移動

就任者	深沢 弘明(学監)	寺崎 隆(英語)
	小林 惣八(世界史)	三浦 徳雄(国語)
	宮 健二(地理・柔道)	横井 孝()
	井上 保広(数学)	古屋 法彦()
	須賀喜一郎()	久保田直継(日本史)
	丸山 精一(保健・体育)	斎藤 実(世界史)
	佐野 文啓(英語)	西田 昭司(物理)
退職者	市川 俊英(事務長)	駒大
	色川 秀男(数学)	猿島農
	長棟 梅峰(英語)	ハワイ
	福田 浩(司書)	国立コ

編集後記

昨年上野先生が叙勲されたという大ニュースがありました。本紙の発行が予定通りです。

定より大幅に遅れてしまいましたので、二十周年記念、第七回総会のニュースを一緒に載せるはめに陥ってしまいました。編集局では年二回発行を目標に努力しておりますので、よろしくご協力下さい。投稿を期待しております。

(敬称略)